







俺はネットの配信者で昼夜逆転の生活。

妻が出勤してから、俺は起きて風呂にはいるのが日課。

夜の生配信でアンチコメントが湧いたのを思いだし、お湯を顔に叩きつけたため息をついたら「啓一くん、おつかれー！」と夜勤明けの義父がはいってきた。

肉体労働をしているとあり、焼けた肌が眩しい筋肉質な巨漢で、ただ年のせいかな、ご立派な太鼓腹。

夜勤が多く、だいたい一日出勤して二日休みの義父とは、妻より家で顔をあわせやすく、昼近くに共に風呂にはいるのも日常だ。ただ、裸のつきあいは少々、気まずい。

恥ずかしいのではなく、ぱんぱんに肉がつまったような黒光りする健康的な体を見ていると、引きこもり生活をしている自分がニートのように思えしまい。

人並みに収入はあるし、一通り家事をしているとはいえ、汗水垂らしでなんぼとばかり健全に働く義父に引け目を覚えざるをえず、彼名義の一戸建てに住まわせてもらっているから、なおのこと。

分かっている、持たなくていい被害者意識にとらわれていることは。

それでも落ちつかなくて、まだ体も頭も洗っていなかったが「ど、どうぞ、お義父さん、ごゆつくり・・・」と湯船から腰をあげた。

が、すぐに腕をつかまれ「きみも疲れているんだろ？ ゆつくり浸かりなさい」と屈託なく笑いかけられ、へっぴり腰のまま、お湯のなかに逆もどり。

義理の息子が部屋で引きこもり、怪しい商売をしていても「へー！今はそういうことでも食い扶持を稼げるんだな！」と感心した義父は、すくなくとも表面上は理解を示してくれている。

ほんらい「そんな不安定な仕事ともいえない仕事でやっていけるのか？」と疑ったり「遊んでいるだけだろ。そんなヒモに娘をやれるか！」と怒つてもよさそうなところ。

ネット活動の知識がなくとも、割りとなんでも「ほー！」「なるほどなー！」「面白いもんだなー！」とあつさり受けいれてくれるからこそ、逆に「腹のなかでは軽蔑しているのでは・・・」と勘ぐってしまう。

信じきれないことに自己嫌悪して、さらに憂鬱になるわけで、やっぱり今のこの状況も居たたまれず、五分くらい浸かって「あーちよつとのぼせたかも」とわざとらしく呟いて、こんどこそ風呂場からでいこうと。

が、またまた義父が腕をつかんで「こらこら、わたしに遠慮しないで！  
まだろくに洗っていないのだろ？」と黒い肌とは対極な真つ白な歯を  
光らせてにつこりんこ。

妻と離婚して、ほぼ一人で娘の面倒を見てきたからか、大阪のおぼち  
やん並みにお節介で、相手が遠慮するほど食いさがってくる。

腕をつかむ手の握力もえぐく、早々、あきらめた俺はそわそわしながらも「背中を流してやるよ！親子水いらずってやつだ！」と義父にう  
ながされるまま。

「娘とはもう風呂にはいれないからな」。

でも、親は子供がいくつになっても裸のつきあいをしたいもんなんだ  
よ。

啓くんは日々、筋トレしているとあつて男も見惚れるようないい体  
していて、疲れている俺には、眺めているだけでなんだか癒しになる

し、ほんと、きみが息子でよかつたと思う！」

「いや・・！お義父さつ・・！」と待ったをかける間もなく、より腹を密着させ、抱きしめる俺の体を、赤ん坊をあやすように上下にゆっさゆっさ。

なんとか突き放したいところ、肉体労働者の黒光りするぶつとい腕の締めつけからは逃れられず「ああ♥あうっ♥あふうう♥お義父さあ・・！だめええ♥」と太鼓腹に先走りになすりつける。

おまけに、義父のもう一人の息子も元気になって、その先つぽが玉に当たり「ひいああ♥お、お義父さあ・・！それ、だめっ、ですうう♥んっ♥んっ♥んんう♥」とさらにお漏らしを溢れさせる始末。



「おお！啓くんは玉をつんつんさせるのが好きなのか！

娘にも玉をつんつんしてもらって、そんな猫みたいに可憐に鳴いているのかい！

ふふふ！娘が羨ましいな！こんな、メス顔で股をびちよびちよにする啓くんを見られるなんて！

いいよ！いいよ！啓くん！娘だけじゃなく、お義父さんにも玉をつんつんされて、ふしだらなきみのエッチな一面を見せてくれよ！」

いや、今の今まで自覚がなかったし、沙絵に触られて「ああん♥だめえ♥玉、にぎらないで♥沙絵えええ♥」と女のように鳴いたことはない。

困惑しながらも、太鼓腹に押し潰されて擦られ、義父のもう一人の息子に玉をいじめられて、押し寄せる荒波のような快感に吞まれるまま「はふう♥んはあ♥はうああつ♥だめっ・・・！お義父さああ・・・！や、

やめてえ♡んふううう♡  
」と丸太のように太い腕のなかで悶えて鳴い  
て泣いてやまず。



俺は大学の友人の彼が好きで好きでたまらなかつた。

が、彼は無類の女好きで、ほぼ毎日ワンナイトラブを。

おかげで色恋のトラブルもほぼ毎日、勃発し、女に刺されそうになつたことも数知れず。

同性の友人の多くは早々に愛想をつかし、巻きこまれることをいやがり離れていったが、俺は仲裁したり、彼を庇ったり、代わりに刺されそうになったりして「俺が頼れるのはお前しかない！」と涙ながらに抱きつかれる親友ポジションを獲得。

報われない恋をする日々は、そりゃあ煩悶するばかりで、飽きるほど嫉妬もしたとはいえ「ワンナイトラブをして、すぐに名前を忘れられるより、セックスができなくても、ずっとそばに居られる方がいい」

と洗脳するように自分にいい聞かせ、なんとか自制心を保ったもので。

大学時代、そうして親友ポジションを死守し、社会人になっても彼とのつきあいはこのまま継続すると思っていたのが、大きすぎる変化が到来。

就職をきっかけに、彼がほんとうの恋をしたのだ。

相手は会社の同期で、新入社員にして女傑と呼ばれるほど、強気で聡明で豪胆な人。

彼女にアタックするようになってから、ほかの女に見向きしなくなり、交際をはじめて、そろそろ浮気心がでてくるかな？という時期になっても「この前、ふざけてんのか！ってビンタされたんだよー」と腫れた頬を見せて惚気てやまず。

さすがに、このときばかりは嫉妬に狂いそうになった。

どれだけ女のケツを追っかけてふらついていても結局、俺のもとにもどってくるのだと、自負していたところがあつたから。

とはいえ、感情的になつて暴走すれば一巻の終わり「ホモつて生理的に受けつけねーんだよなー！」と豪語する彼に絶縁されてしまう。

彼と共に歩めない人生は、俺にとって死も同然だったに、嫉妬もろもろ無理矢理飲みこんで、彼と彼女三人で、恋人プラスおまけとして、どうにかこうにか親しく交流を。

三人でつきあううちに、なんだかんだ心の整理がついていき、彼らのおめでたを聞いたときも、若干、胸を痛めつつ「末永く、家族ぐるみでつきあいたい、彼の子供を近くで見守れるなら、それ以上は望まない」とあまり心を濁すことはなく、どこか腹を決められた。だというのに。

ぶじに子供は生まれたものの、彼女の体調が急変、みるみる悪化して

いき、そのまま帰らぬ人となった。

はじめは嫉妬の対象だったのが、そのころは、もうすっかり家族同然のような相手だっただけに俺は心から悲しみつつ、全力で彼と赤ん坊をサポートしようと決意を新たに。

彼女の遺体に手を合わせたあと、一旦、二人で家に帰り、これからに備えて休んだのだが、翌朝、彼はどこにもいなく、居間のテーブルにメモが。

ちようど引き戸と向き合うようにベッドに腰かけ、涙目で頬を赤らめ涎を垂らし、広げた太ももを痙攣して「はっ・・♥はあ♥はふう♥おっ、義父さあ♥」と励んでいる真っ最中。

「シャツをめくって胸を揉みこみ、指で乳首をいじりながら、剥きだ

しにした性器を切羽詰まったようにしきり扱いて「あああ♥義父さん  
っ♥だめえ・・・！」とお漏らしどばどば。

「んっ・・・！んう！あああ♥だめえ・・・！義父さあ！俺たちっ、血、  
繋がって、なくてもお、親子なのにつ・・・！父親と、息子があ、エッ  
ちな、ことっ、したら、だめなのがいい♥

あっ♥あっ♥んあっ♥んんああ♥と、義父さんにつ、触られるとお、  
おちんちん、すごくっ、濡れちゃう♥恥ずかしっ・・・！恥ずかしいよ  
おお♥

んはあ♥はう♥はぐううう♥義父さっ♥義父さんっ♥見ないでえ・・・！  
笑わないでえ・・・！先っぱ、ほじくらないでえ・・・！昔、おしっこ、  
漏らしたのお、思いださせないでっ♥

やあ♥やだっ♥もう、義父さああ・・・！あのところよりっ、いっぱあ、  
漏らしてるって、いわないでっ・・・！ばかっ・・・！ばかあ！義父さ



んの、ばかあああ♡」

光希の妄想する俺は、義理の息子になんてことをしているのか。

「俺ってこんな愛撫のしかたすると思われているの？」と恥ずかしいような、思った以上に光希の痴態が悩ましげで、こちらこそ体がむず痒くなつて悩ましくなるような。

「んはああ♡らめえ♡義父しゃああ♡」と幼子のように舌足らずに鳴いて射精するのを目の当たりにして、鼓動が乱れに乱れ、さらに俺の心臓をわるくするように尻の奥に指を飲ませ、見せつけるように広げてくぱくぱつ♡



